

参加・参画のアラカルト

神奈川県域の、特徴的な若者の社会参画の実例

CASE_01 若者をつくる、お気に入りの空間
COCORUかまくら／鎌倉青少年会館

行政職員が
居場所施設を立ち上げる

CASE_02 来た、見た、書いた
—インタビューで出会うまちのあれこれ—
知る、伝える。ボランティア／横浜市青少年育成センター

ボランティア活動から
まちに関わりはじめる

CASE_03 「ちょっとだけやってみない？」 が、ひらく世界
フレンズ☆SAKAE／Sakae Wakamono Creation2024

日常の居場所から
まちに関わりはじめる

CASE_04 「マイプロ」からはじまる、まちへの参画
ふろぷろKananishi／FROM PROJECT

行政と民間のタイアップで
まちに参画する

CASE_05 大学が育む、未来への種 ①
神奈川大学共通教養科目「体験型研修」

体験カリキュラムを通じ
まちに関わりはじめる

CASE_06 大学が育む、未来への種 ②
神奈川大学社会教育課程
かながわユースフォーラム実行委員会

社会教育課程から
まちに参画する

CASE_07 サポーター、というライフスタイル
県立青少年センター人材育成推進事業
「ステップアップキャラバン」
／神奈川県子ども会連絡協議会

地域の子ども会から
まちに参画する

世は「こどもまんなか」の時代。各地で青少年、すなわち子ども・若者施策が様々に展開される中で、乳幼児や児童の居場所づくりに特に力が注がれています。そんな中、行政としては比較的遅れをとってきた若者世代の居場所づくりに果敢にチャレンジしたのが鎌倉市。

『学校でも家庭でもない、中高生のためのもう一つの居場所。中高生が放課後や休日を使い思い思いに過ごすことができる。「中高生のやってみたい」を実現でき、新たな出会いやつながりの創出も生まれる場。』をコンセプトに、「COCORUかまくら」として、2024年にリニューアルオープンしたばかりの鎌倉青少年会館を訪れました。



(上) グリーンのある空間に、若者が一息つく姿、語らう姿を想像する
(中) 外観は昔ながらの「会館」の趣き
(下) Webページで閲覧可能な「COCORUかまくら」ができるまで

COCORU（ココル）かまくら／ 鎌倉青少年会館

鎌倉青少年会館とは、「青少年に交流と活動の場を提供し、青少年の健全育成を図る」ことを目的に設置された施設です。鎌倉駅から徒歩30分弱の閑静な住宅街に位置しており、会館内には学童・アフタースクール「かまくらっ子」等他の機能も併設しています。

今回鎌倉市では、中高生が安心できる、チャレンジできる、人とのつながりを感じられる居場所の提供を目的として、会館内を音楽やダンス、自習等、自由に過ごせる場に、青少年会館広場をバスケットやサッカー等、自由に運動ができる場になるようリニューアルし、2024年11月10日にオープニングイベントを行いました。



「鎌倉青少年会館
リニューアルについて」
鎌倉市





(左) カフェのようなたたずまいのロビー。珍しいブランコ型のソファ（左端）は購入した一方、市職員による寄付の書籍、市役所の片隅にあった家具などを様々組み合わせ活用している

(下) パンフレットの表紙からも、やわらかいイメージが伝わる



居場所づくりのDIY

行政職員が語る「COCORUかまくら」スタートアップ

鎌倉市青少年課が運営する施設、「鎌倉青少年会館」は、中高生の居場所として2024年度にリニューアルオープンしました。

委託事業ではないため、実際にその実現に奔走したのは行政職員と当事者である若者たち。誕生したばかりの居場所を訪ね、青少年課職員のお二人に、立ち上げへの思いやプロセスについて伺いました。

立ち上げ前の課題

青少年課の事業のターゲットは「青少年」ですが、その定義は幅広いです。これまで青少年課がやってきた事業はどちらかというと、「放課後かまくらっ子」の立ち上げなど、小学生世代に重点が偏っていて、中学生、高校生に全然手が届いていなかったという状況でした。

青少年会館は「青少年の活動と交流の場所」となっていますが、リニューアル以前の中高生の利用率は3～4%程度。青少年会館には「放課後かまくらっ子」が併設しているので、小学生は使っていましたが、多くは貸館の利用として大人の団体が使うような施設で、そこに課題があると感じていました。

青少年課の事業として、ここ数年間は「放課後かまくらっ子」を全ての小学校区で実施することに力を割いていましたが、次は小学生より上の世代の事業が必要だということを考えていました。

市の総合計画や「鎌倉市子ども・若者育成プラン」にも、「青少年の居場所づくり」と「地域の担い手となる青少年の育成」というのが2本柱であるがありますが、中高生世代やもう少し上の世代に対してアプローチできていなかったんです。

「マーケティングリサーチ」！

そこで目をつけたのが既存の「青少年会館」ですが、ボトムアップで何か新規事業をやるには難しいところがありました。ただ、最初からリニューアルを推進したわけではなく、まずは中学生と高校生を対象にアンケート調査（令和4年度）や、『わたし』の居場所」をテーマに講演会（令和4年度）を実施しました。そういう土壌づくり、雰囲気づくりに費やしたのが数年間ありました。

中高生対象のアンケート調査は全体で約3,000件の回答が集まりました。その中で「家と学校以外に安心できる場所がありますか？」という質問に対して3人に1人は「ない」という回答で、さらに4人に1人が「学校への居場所感」についてネガティブな回答だったんです。これがリニューアルに向けた一つの推進力になりました。

そこで令和5年度には「鎌倉青少年会館リニューアル実行委員会」を立ち上げて、「青少年会館がリニューアルするとしたら、どういう場所になってもらいたいのか」ということを、中学生、高校生の子たちに考えてもらいました。

加えて、社会的にも不登校の増加や「助けてが言えない」などの課題が取り上げられていたり、こども家庭庁の「こどもの居場所部会」が発足したりする動きもあり、さらに鎌倉市として神奈川県に準じた「鎌倉市こどもまんなか応援サポーター宣言」を出す中で、議会の方からも“子どもの支援”や“子どもの居場所”への声が上がってきていた頃でした。

その機運の中、鎌倉市では『かまくらまるごと子育て・子育て戦略ーきらきらプロジェクトー』を計画し、令和6年度から順次やっていこうという動きがありました。それは既存の枠の予算ではなく、枠外の予算で要求ができたので、これには乗らなきゃと、青少年会館のリニューアル費用を令和5年度に積みました。それでやっと今年度を迎えられた…という形ですね。



オープニングイベントで用いた看板は、実行委員の手による作。文字は立体感がある

若者をつくる空間

鎌倉青少年会館リニューアル実行委員会は令和5年度に立ち上げて、公募をしたり、「放課後かまくらっ子」で繋がりがあった子に声をかけたりして、中高生7人で構成しました。夏休みに3回、冬休みに2回集まり、「居場所って何だろう？」とブレインストーミングなどを行いました。

リニューアルを考えるにあたって、同じ中高生でもいろんな人がいることを知ってほしかったので、「この子にとって居場所って？」、「この子ってどういう子なんだろう？」、「居場所ってどういう場所なんだろう？」みたいなことを自分たちで考えてもらい、それらを経て「居場所ってこういうのが必要だよ」から「鎌倉では何が必要だろうね」ということを考えてもらったり、青少年会館の各部屋のコンセプトとかを考えてもらって、「じゃあ実際に何を置いたらいいかな？」「どんな雰囲気の部屋だったらいいかな」という風には作っていきました。

気軽にスポーツができるようにしたいという意見もあったので、外のグラウンドにバスケットゴールとサッカーグラウンドマークの整備を計画し

ガバメントクラウドファンディングもやりました。

目標額は300万円でしたが、130万円ほど集まってバスケットゴールを作ることができました。このように自分たちが言った考えが反映される、「自分たちで作った」という感覚を持ってもらいたいです。

行政の中で進めていて思うこと

単純に中高生がやりたいことをボトムアップで反映させるのには課題もありました。青少年が望んでいるからというだけで家具を買ったり、鎌倉市の名前を使ってクラウドファンディングをしたりということは通常はやはり難しいです。

今回は「きらきらプロジェクト」をやろう、とトップが判断してくれたのは大きかったです。それがなかったら青少年課の事業費の枠内でやることになるので、今やっている事業を削ってこちらに振り分けるというのは難しいですね。

今回は流れに乗って「COCORUかまくら」を立ち上げることができましたが、事業継続には予算をつけなくてはなりません。しかし、事業継続にこれだけ必要ですっていうことをわかってもらうには現場を見ていただかないとなかなか伝わりません。今、意思決定の立場にいる団塊ジュニア世代の方々は、周りにたくさん若者がいる青少年期を体験していて、行政が若者の居場所を用意する時代ではなかったので、「行政がやることなの？」という思考がベースにあるような気はしています。

「行政がやらないといけない」というところをいかに説得できるか。ここがこれから求められることだと思います。



(上) 受付にはかわいらしいオーナメントが。実行委員会で決めた「COCORU」という名称は、フランス語で「お気に入り」なんだとか

(左) 小学校の校庭ほどの大きさがあるグラウンド。様々な使い方が期待できそう



お話を聞かせていただいた鎌倉市青少年課の課長と担当のお二人。
常に地域の若者を中心に考える姿に感銘を受けました

数値で示す

事業として取り組む以上、効果検証は不可欠です。リニューアルオープン前の延べ利用率をみると、半数以上は30歳以上の大人で小学生が40%ぐらいと、中高生の利用が少なかったのです。まず数字としてわかりやすく、その比率を上げていく幅を年度ごとに設定したいと思っています。

例えば中高生の「何パーセントが使っている」などもあるといいと思いますが、市内在住、市内在学、市外在学などいろいろあるので、中高生全体の正確な数字を出すことが少し難しいと感じています。それに対して利用者登録数や利用数は数字として出しやすいです。5年間ぐらいで中高生の利用が徐々に増えて根付いていくことを期待しています。

専門の相談員は置けないですが、家でも学校でも言えないような相談や愚痴などを拾っていきたいとも考えています。[学生のユースサポーター](#)やスタッフと仲良くなって、小さな助けてが言える、子どもたちの心の不調の予防になる場所にもしたいです。そういった相談、ここだからキャッチができたということも数値に出せる可能性はあるのかなと思っています。

また、アンケートの中でポジティブ回答が見られたらいいと思います。放課後に行っているとか、他の学校の子と仲良くなるきっかけになったというような声が出てくれば必要性が伝わるのかなと感じますが、数値化が難しい部分でもあります。

オープンな場でありたい

数値的なこと以外に「その施設ができてよかったね」、「やっぱりあった方がいいよね」、「もっと盛り上げたいね」と、地域に馴染んで、地域全体の雰囲気醸成していくと根付いた、成功したって言えるんじゃないかなとも思います。

「青少年の居場所」と銘打つと、青少年問題協議会や保護者さんなどからは「不登校の子が来られるような場所」という言葉が上がるんですけど、青少年課の事業は「青少年は誰でも来ていいよ」という

ところが基本です。だからCOCORUかまくらに来たら支援がもらえるとか、何か助けてもらえるみたいなおところではなくて、最初は誰にでもオープンで、そこでいろんな関係性を築いてもらって、その信頼関係の先にポロッと何か出てきた時、家のこととか学校のこととか、自分が抱えている悩みが出てきた時に、それをつないでいくっていうんですかね、そういうことは考えています。

スタッフをどう確保するか

相談の事例もそうですけど、ユースセンターのスタッフとして中高生とかかわることを市の職員がやるとなると、プロじゃないのでわからないから委託しようと思えることが基本なのかなと思いますが、今回立ち上げ段階は市の直営で始めています。

鎌倉市のおもしろいと思うところが、外部人材を職員にするとところなんです。そういう人が立ち上げの段階にいたりとか、民間の考え方を取り入れて職員のマインドを変えていくみたいなのがあるなと思っています。リニューアルにあたっては、「中高生のためのもう一つの居場所」について、ノウハウが全然ないので、[コンサルタントは入りたいと考えていました](#)。

自治体にはこういう青少年に関心のある職員が元々いるとは限らないので、そういう時は予算や仕組みとの兼ね合いですが、外から職員として入れるというやり方もありますよっていうのが一つあります。今回も行政職員として動かしていくときに、プロからアドバイスをもらいながら進められたので立ち上がりまでできたというのはあります。

先のことを考えても、運営業務を引き継ぐだけでも大変なのに、中高生への声かけをどうするか、関わり方はどうかというのはプロがいないと難しいです。行政職員が直営でやる場合は、組織として持続可能な方法を考え、共通理解を持ちながら進めていく必要があります。



いつでも行っていい場所に

リニューアルオープンしましたが、現状はほとんどの人が青少年会館自体を知りません。成人の集いでとったアンケートでは、青少年会館を知らないし、別に行きたいと思わない、知っていても学童やデイサービスのイメージが強い、そんな建物です。

青少年課でも、青少年会館、COCORUかまくらを中高生がメインに使う場所にしていきたいですが、多世代交流の場とする要望もあります。

私たちとしては、オープンしたてですし、まずは中高生の定着を優先する考えです。中学生、高校生たちは青少年会館が「自分たちが行ける場所」と思っています。「あそこって小学生が行っているよね」とか、「中学生が行って何できるか全然わからん」、のような感じです。だからまずは、中高生が使える、いつでも行ってもいい場所だ、自分たちが行って楽しめたり安心できたりする場所だ、と定着させることを優先しようと思っています。

地域の方からは、「中高生に対して何かやってあげたい」、「自分は〇〇ができるから、教えられよう」などの声をいただきます。本当にありがたいですが、まず中高生の子たちがここに集まって「こういうことがやりたいな」、「〇〇したい」という声が出てきた時につなげたいと思います。最初から大人が主導して「はい！〇〇を教えてくださいの人が来ました！」というようなことはあまりやりたくないです。

中高生がメインの空間ではあるので、反対に小学生には「中学生になってから来てね」などの声かけをしています。ただ元々は小学生の方が青少年会館を使っていたので、「小学生は夕方5時まで使えるよ」ということと「それ以降に来るなら中学生や高校生と一緒に来てね」という風に運営しています。

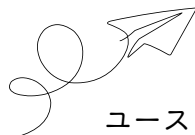
小学生だけではなく大人の方も、以前から施設を使っていた人どう折り合いをつけていくかは今の課題としてはあります。

まだオープンしたてなところがあるので、これからどんな子が来るかはわかりませんが、ダンスをやっている子が鏡を使って練習できることをすごく喜んで、オープン前から使ってくれました。鏡もそういった使い方のために買ったものだったので、中高生が使いやすい場所だということが広がっていくといいなと思っています。

卓球をしにいつも来ている子は、「(存在が)これバレたらめっちゃ来るんじゃない？」とか、居心地がいいから「このままあまり知られないように」とか言っていましたね。

近くには中高生が遊ぶところがありません。お金を払ってスタバに行ったり、大船駅や横浜駅まで行ったりしているので、近くに集まれる場所ができて嬉しいと言っていました。中高生同士の口コミでも、広まっていくいいなと思っています。

(聞き手 専門部会委員 南 太貴
事務局職員 狩野 陽士
事務局職員 長南 悠太)



“COCORUかまくら”のような中高生が集まる拠点のことをユースセンター、そこで行われる実践のことをユースワークと言います（※1）。こども家庭庁が発足してからこのユースワークの取組みに注目が集まっていますが、取材の中でもあった、ユースワークは「行政がやることなの？」という問いに対して、色々考える余地はありそうです。みなさんはどう考えますか？「行政がやる理由はこれです」と私も自信をもって提示ができるわけではありませんが、みなさんと考えるきっかけになればと思います。

さて、青少年育成の領域の中で、取材の冒頭でも「小学生世代に重点が偏っていて…」と話す通り、小学生が対象の取組みはイメージしやすいかと思います。キャンプなどの体験活動、学童などの放課後のあそび場…地域の中で子どもが安心して遊び、すくすくと育つ場所をつくる、そういうことに対してNOという人は多くありません。

この文脈からユースワークの価値について考えていきたいと思います。まず中高生にとって体験活動が必要か考えてみましょう。学校で受ける国語や数学などの学習と違い、身体感覚を通して学習していくことを体験活動・体験学習といいます。中高生の体験学習と言えばボランティア体験や農業体験なども印象に残っている方も多いのではないのでしょうか。学校現場ではアクティブラーニングやアイスブレイクなど、体験学習の要素が含まれている授業のスタイルが普及していることから、体験学習の価値は年齢に関係なくあると感じます。

ただ、中高生の成長や教育の領域は学校に集約されて行なわれがちです。ボランティア活動も夏休みの課題として扱われたり、カリキュラムの中で体験活動などが提供されたりしています。これが不要と言いたいわけではなく、ポイントは学校教育に内包されてしまうと義務的な部分が大きい体験学習になってしまうということです。小学生の体験活動は学校内ではなく余暇の中で遊びやキャンプの機会があったのではないのでしょうか。

中高生にとっても余暇の中で選択した体験というのは大事です。皆さんに想像してほしいのですが、自分のアイデンティティを話すとき、自主的に選択した経験をもとに話す方が多いのではないのでしょうか。例えば就活の面接のときに「ガクチカ」（：学生時代に力を入れたこと）としてボランティア活動について話すときでも、自分で選択して活動したから「これが私のガクチカです！」と自信をもって語れると思います。つまり自主的な体験活動の機会は若者の前向きなアイデンティティ形成に大きな影響を与えています。

（学校教育でのよい体験活動は、自主性を保証する仕組みがあったり、次の自主的な体験活動のきっかけとして機能していたりします）。

ここでユースワークの話に戻します。『ユースワークとは、おもに10代の子ども・若者の育ちを地域コミュニティで支える活動である。学校教育がフォーマル教育と呼ばれるのに対して、インフォーマル教育と呼ばれることもある。子ども・若者は自分の意思で自由に場に参加し、そこで働くユースワーカーと呼ばれるスタッフや他の若者と共に、自分がやりたい活動を楽しむという「自主性（voluntary）の原則」がユースワークではもっとも大切にされている。（平塚真樹(2023)』

ユースワークの定義は社会や若者の違いから国や地域によって語り方が変わりますが、インフォーマル教育（※2）や自主性という要素は共通して見られます。

家や学校から離れた余暇の時間にユースセンターを使ってもらおう。“COCORUかまくら”で中高生が放課後に友達とダベったり、休みの日の待ち合わせに使ったり、一人で来てゲームをして遊んだり…。目的があってもなくても、自分自身で行くこともやることも選択ができる場所がユースセンターです。いわゆる居場所と言える場所かもしれません。そんな“COCORUかまくら”で新たな人と出会い、友達になったり、初めましてで終わったりするなど、ここで起こる出来事は一種の体験活動です。多様な人が集まる場所でスタッフのユースワーカーが様々な仕掛けを行ない、中高生自身のアイデンティティの形成につながる体験を保障する。その体験の中で中高生は自分自身の輪郭を獲得していくのではないのでしょうか。

ただし、若者自身の選択が軸にあるため、量的評価も定めにくく、質的評価も何を持って良しとするかは悩みどころです。そういった面では行政との相性は悪いかもしれません。

改めて“COCORUかまくら”のような中高生が集まる拠点の運営、ユースワークの取組みを「行政がやることなの？」という問いに対して、みなさんはどう考えますか？

（専門部会委員 南 太貴）

（※1）一般的にユースワーク（ユースセンター）の対象は中高生に限定していませんが、この文章ではイメージしやすいように中高生が対象と捉えられる書き方をしています。

（※2）インフォーマル教育：あらゆる人々が、日常的経験や環境との触れ合いから、知識、技術、態度、識見を獲得し蓄積する、生涯にわたる過程。組織的、体系的教育ではなく、習俗的、無意図的な教育機能である。

（文部科学省：多様な生涯学習機会の分類について）
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo2/010/siryo_u/_icsFiles/afieldfile/2015/06/24/1359174_3_2.pdf

来た、見た、書いた

—インタビューで出会う、まちのあれこれ—

#知る、伝える。ボランティア／

#横浜市青少年育成センター



(上)取材での一コマ。オンラインコミュニケーションツールを活用しつつ、まちを歩く体験も大切にしている

コロナ禍の2020年、横浜市青少年育成センターも例年通りの事業を実施することが難しく、「次世代人材の育成」にかかわる取組みも手探りな状態でした。そこでZoomなどのオンラインコミュニケーションツールが充実してきた、同年11月に『オンラインで「子ども・若者の居場所」や「地域の情報」などを取材し発信するボランティア』を募集したのが「知る、伝える。ボランティア」の始まりです。

知る、伝える。ボランティア

「知る、伝える。ボランティア」は「子ども・若者」、「まちづくり（地域活性）」などにかかわる横浜の個人・団体を若者ボランティアが自分自身の目線で取材するボランティアです。取材をもとに制作した記事をメディアプラットフォーム「note」などに投稿してアーカイブ化することにより、地域活動の解像度を上げる一助となることを目指しています。参加する若者は大学生が中心で、広報的な活動として参加してもらっています。

地域の活動団体を取材、SNSで記事を発信

知る、伝える。
ボランティア



記事発信 note

〒231-8454
横浜市中区住吉町4-42-1 関内ホール地下1階
公益財団法人よこはまユース
横浜市青少年育成センター
Tel: 045-664-6251



(左)様々な人材の取材を通してまちへの理解を深める

(中)執筆した記事をnoteで公開することで、地域側も広報や活動をふりかえる機会に
(右)参加者の興味の高まりに応じ、発表などプラスアルファの機会が生じることも



取材という、ボランティアのかたち

元 参加者が語る 地域へのはじめての歩

コロナ禍のさなかに立ち上がった「知る、伝える。ボランティア」の元参加者で、現在行政職員として地域に関わっている2人のOB・OGが、当時の様子について語ります。

若者の社会参画の第一歩、「まちとの出会い」がボランティアという入口から成り立っている点が特徴ですが、コーディネーターによる仕組みづくりにも思いを馳せたくなるお話です。

ボランティアの入口

大学が社会学部だったので、取材して相手の話を聞くというのをやってみたいな、色々聞けるし楽しそうだなと思って参加しました。昔は文字を書くこと、自作で新聞を作ることなんかも好きだったので興味があって。自分が取材した内容を自分だけの言葉に表すことができますし、他のボランティアの人の記事から、同じインタビューでも違う表現、感じ方を知る、そういうのもいいなって思っていましたね。

当時はコロナ禍で、人とのつながりが絶たれた中、地域や同じ興味を持つ人とつながりたい気持ちもありました。

ボランティアの居心地

最初は地域の方を青少年育成センターで取材する単発でしたけど、次は別の方を取材して地域を訪ねる形、今度はさらに別の地域イベントを体験取材する形というように、段々と深く関わる形になっていきました。期間も長くて、サークルに近かったです。ただ誰かが仕切るわけではなく、同じ仲間という感じがして楽しかったですね。

大学生が主体の居場所づくりやNPO的な活動をやっている団体もありますが、よくない意味でサークルチックになることもあると思うんです。どういうことかと言うと、固定化したメンバーの中で活動するとか、上下関係が生まれて「報告する」、みたいになるイメージですね。取材という活動は、取材の対象が必ずいるので、固定化した関係になりにくく、もう少し地域の人と一緒に何かできるような気がしています。

このボランティアの一番いいところは、自分の好きな時に好きなだけ参加できることでした。サークルの場合メンバーが固定化しがちですけど、このボランティアだと好きな時に参加できるので毎回メンバーが違うんですね。取材先もその時々で選べて、自分の興味がある団体さんの取材に行ったり、反対に元々はあまり興味がない分野だったものの、たまたま取材に行った結果、その分野が気になり始めたり、色々な人・ことに出会えることが魅力かなと思います。



地域に思いを持つ、様々なプレーヤーからお話を伺い、noteに記事を掲載する

朝が早かった時もありましたけど、無理なく行くことができました。コロナのために学校がなかった分、第二の学校みたいに感じていました。何だろう、いい表現がないんですけど、遊びに行くでも、旅行に行くでもなくて、どこか自分のミッションとして捉えていたところがありましたね。

アルバイトとも違って、「なんかちょっと今日は嫌だな…」というようなこともなかったです。「行きたくない」と思えば行かなくてもいいんですけど、取材はその日にしかできない気がしていました。「この機会を逃したら自分にはできない気がする」という気持ちで、だからといって「今行っておかないと！」というほどの義務感もないんですけど、今考えるとただ単に「経験しておこう」みたいな気持ちだったのかもしれないですね。その後の人生で、地域の人を取材する、みたいなことがあるかもしれないですけど、仕事となるとまた立場も違いますし。

ただ、公務員として働いている今は学生のときに大人の人と話していてよかったなって思いますけど、当時「絶対にこの経験が必要でしょ」、とは特に思っていなかったですね。

コーディネーターの立ち位置

当時はコロナ禍で外に出られない、人と話せないという中だったので、同じような学生や地域の人と関わる機会が持てたのは楽しかったです。アルバイトとも違って、ちょっと学校みたいでしたよね。

青少年育成センターに対しては区役所のような「公的」という感じであまり見ていなかったのですが、最初に入る時は緊張しましたが、2回目からは気軽に行く場所という感覚ではありました。

活動にはコーディネーターで南さんが付いてくれました。初対面の印象は、思ったより若い、でしたね。最初のイメージは地域のサッカークラブのコーチのような、指導者ポジションですけど、すごく堅いわけでもなく親しみがある感じです。雰囲気としては、事前に想像していたよりシャキッとしている、という感じでした。

コーディネーターはもちろん親ではないですけど、先生に近いんですけど、先生ほど宿題やれって

「少しでも地域のことが気になっていて、
でもなかなか一步を踏み出せないよっていう人に
参加してほしいです」



青少年育成センターや地域の施設で取材した内容をもとに記事をまとめていく。地域で実際の活動の中に入ることも

いうわけでもない。解答を出す、渡すわけではないですが、その方向に導いてくれる感じがあります。高校の部活動の顧問みたいな雰囲気でもないし、サークルの先輩でもない。大学の教授みたいに堅苦しい感じでもないですし…雰囲気は大学の職員が近いかな、と思います。

南さん（コーディネーター）が学生と地域との間にいることは大きかったです。いきなり学生が、「地域のイベントに入りたいです」と言いに行っても、うまくいく可能性がそんなに高いとは思えません。「急に言い出して何だ？」となると思うんですけど、よこはまユースの南さんから話したら「なるほどね」となりやすいと思います。その入口次第で、ボランティアたちが地域での活動をどこまでできるかわ変わってくるかなという気はします。

学生が自分たちだけで地域に対してアクションをかける場合は、目的が決まっていって「この辺までやるよ」という部分が明確になっていたら動けるかもしれません。例えばいろんな団体が出ているイベントに、よこはまユースボランティアとしてブースを出展するというのもおもしろそうだなと思います。

取材のアポイントメントについては、自分たちでアポイントを取った方が体験としていいのではないかなと思いますが、こういう理由で、という後ろ盾がないとやっぱり上手くいかない気がします。見ず知らずの他人にいろんなことを話したいとは思えないと思うんです。そういった意味で、南さんっていう窓口があると取材される人は安心して話してくれると思いますね。

取材の経験値

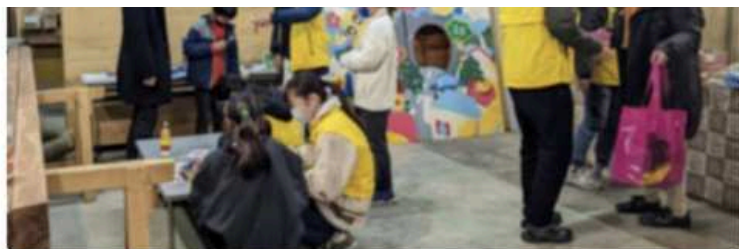
このボランティアは合う、合わないがあると思うんですけど、少しでも地域のことが気になっていて、でもなかなか一步を踏み出せないよっていう人に参加してほしいです。実際に地域を見ないでそれを思っているよりは、コーディネーターがいる安心できる環境の中で、地域の人が実際にどんなことをやっているのか見た方が経験値になるのではないかなという思いがあります。

自分自身にとっては、取材をすることそのものが知識を得る一つの構成要素になっていて、いくつも経験することでストックが増えていきました。子ども食堂をやっている方の中でも、外国人の方もいたし、長くやっている方もいたし、いろんな人生の歩みがあります。そういう様々な経験が頭のタンスの中にストックされていく感じです。その経験から、自分が全くその人の経験はしていないけど、同じような人がいた時に少しその人が理解できるような感じがあります。

いま、公務員として

今は、大学生としてプライベートで地域に関わっていたときは違って、いろいろな計画がある中で仕事として動かなくてははいけません。自分が「こうした方がいいんじゃないか」と思ってもできなかったり、しがらみが多い部分もあったりして、なんでも自由に動けるわけではないというのは感じます。

「ボランティア当時、もっと楽しんで 関わっていたことを 思い出しました」



麦田元気朝市祭の体験取材

横浜市中区麦田町で麦田町発展会の方が主催する「麦田元気朝市祭」に「知る、伝える。ボランティア」も関わらせていただきました。



基本的に、取材結果はnoteで記事としてレポート。「麦田元気朝市」の取材では、新聞形式でも制作するなど、アウトプット方法もボランティアたちで工夫している

地域の人とのコミュニケーションでも、仕事では「いやそこまではちょっと答えなくていいかも…」、「そこはもう個人にがんばってもらって、その人が自分で探した方がいい」というようなこともあります。学生のときは、会った人に聞かれたことは何でもかんでもできる範囲で答えていましたね。今は自分が答えられそうでも、そこまで答えなくていいというか、あまり答ええない方がいいこともあるので、その線引きが結構難しいです。

仕事ではお年寄りに関わることも多くて、地域の支援センター等の公共施設とも電話でやりとりしています。学生の当時、体験取材で参加したイベントに来ていた公共施設の職員さんたちが、きっと地域でおじいちゃんおばあちゃんを支えているから、自分たちの今の仕事も成り立っていると感じます。それを知らないで、職員さんの存在をあまり意識しないかもしれませんが、当時の取材があったから、支えていただいている実感があります。こちらでも安心できますね。

楽しむことを忘れたくない

仕事の中では、地域イベントにも携わっています。ボランティアで経験した地域イベントと同じような感じなんですけど、自分が材料や物品を揃えたり、契約をしたり、下準備をしていく中で、どうしても仕事、仕事…ってなってしまっていて楽しむ気持ちを忘れてしまったことがあったんですね。

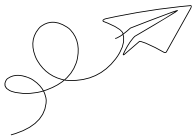
イベントを成功させなくてとはか、失敗してはいけないとか、そういう気持ちが強くて楽しむ気持ちを忘れてしまっていたんです。仕事で関わったお祭りのようなイベントは、提供する側ともう側、のようになってしまっています。行政側の私たちは、会場を提供して当日うまく回転させたりとか、出展団体とはお金のやりとりばかり気を遣ってしまったりとか…お祭りもなんだか普通の商業施設と変わらない感じになってしまっているのかもしれないと思って。お店を増やすことが目的になって、どれだけ売れるかとか。

一時期ちょっと辛くなっていたんですけど、ボランティア当時の経験を思い出すと、もっと楽しんで関わっていたことを思い出しました。今の仕事の立場とボランティアとはやはり違うとは分かっているんですが、ボランティアの楽しい純粋な気持ちを置いてきてしまったなって、その時しみじみ思いました。

「知る、伝える。ボランティア」は、振り返ったときに自分も楽しまなきゃなって思わせてくれるような、そんな素敵な経験だったなと思っていきます。

(聞き手・構成 専門部会委員 南 太貴
事務局職員 長南 悠太)

エディターズ
ノート
課題解決をしない
ボランティア



(表1)「知る、伝える。ボランティア」の活動資料より



(上) 活動のスタートは横浜市青少年育成センターで。青少年向けの様々な情報に触れられるよう、工夫されている

横浜市青少年育成センターとして「知る、伝える。ボランティア」を行なう目的は、地域で青少年を支える「次世代人材の育成」を達成するためです。そのため、若者がボランティアを体験してどうなってほしいのかを考える必要があります。一般的に地域の担い手が生まれるイメージは、若者が地域参画し社会に何か価値を生み出すこと、地域の中で「若者の力」を発揮してもらうことですが、それをするためにはあらゆるハードルがあります。

例えば若者が地域の中で「子どもの学習支援活動」をやりたいとなったとき、どんな学習支援があるのか、どこでやるのか、何から始めるかなど考え始めたらきりがありません。大学に拠点がある部活やサークルとは違い、若者にとっての地域(社会)は遠いのです。

若者が地域参画するためには「知る」ことでインプットし、そして言語化して「伝える」、その先に「生み出す」という段階があります。また、この段階にも「自分」・「他者」・「社会(地域)」というような対象の違いがあります。表1はそのことを図示したのですが、右上の「私が社会に(を)生み出す」ことをするためにはそれ以外の部分も育んでいく必要があると感じています。

このボランティアの「取材して記事に起こす」体験を通して自分と社会のつながりを感じ、自分の志向を確認する。その過程をミーティングでも補完していくことで、地域の中で「若者の力」を発揮してもらう土台ができていきます。(もちろん、最初から地域参画していく中でインプットとアウトプットを経験し、若者がコミットして力を発揮してくれる場合もあります。)

「知る、伝える。ボランティア」は一般的なボランティアとは違い直接的に課題解決・支援をするわけではありません。例えば町のゴミ拾いや子どもへの学習支援のように「ゴミがこれだけ拾えた」「子どもがこんな点数取れるようになった」などと違い、目に見える達成感を感じづらい活動です。ただ、地域活動を記録に残すことも同じくらい大事なことですし、地域とのかかわりが希薄になりつつある若者が、「知ることから地域につながる」、そういう地域の入り口も必要なのだと、このボランティアから感じています。

(専門部会委員 南 太貴)



(上) ボランティアではあるものの、この活動の実施に地域の方々の協力が欠かせない。取材の調整などにコーディネーターとして職員が入っていく



インタビューでも記憶に残ったと言及があった、トニー・ジャスティスさんが運営する子ども食堂、「ノヴィーニュこども食堂」の取材資料より

(上) 横浜市青葉区にある子ども食堂。ボランティア参加者は、ベイエリアだけでなく、市内の様々な場所に赴く
(右上) 食事を分かち合う文化がある、ガーナ出身だからその視点で日本の見えな
い貧困に一石を投じる
(右下) 多様化する食環境のなかで、様々な立場の子どもたちが食べやすい「食のバ
リアフリー」を目指している

(資料提供) ノヴィーニュこども食堂&こども寺子屋 (NPO法人アフリカヘリテイジ
コミティー)

エディタース ノート

コーディネーターとして語る
若者との関わり方

今回インタビューに答えてくれた「知る、伝える。ボランティア」のOB・OGには、心からありがたく感じています。ボランティアを卒業してしばらく経ちましたが、ボランティアとコーディネーターという関係性でなくなっても付き合いがあることは本当に嬉しいことです。

さて、ここではコーディネーターの立場で取材の内容を解きほぐしていきたいと思います。

まず、ボランティア参加者との初めましての場についてですが、「知る、伝える。ボランティア」に参加申し込みがあったとき、私はすべての申込者とオンラインで面談をしています。そこで活動の説明をしてイメージとのすり合わせを行ない、面談後に参加するかしないか決めてもらっています。

何より大事なものは、お互いに知り合うという時間に行っているということです。インタビューの中でも「思っていたより若かった」という発言がありましたが、申込者の若者にとってボランティアの主催者（地域の大人）は未知な存在なので緊張していると私は考えています。一方的に活動の説明をするだけではなくて、雑談も意識するようにしています。

また、面談の設定も気をつけています。最初のステップで「話をしたいから青少年育成センターに来て」、というような「行ったことのない場所で知らない人と話す」状況は作らないようにしています。そういう時にオンラインツールは有効で、若者の参加のハードルを下げて知り合いになることができます。

もう一つ、インタビューにあった「自分の好きなときに好きなだけ参加できる」、「そんなに『行きたくないな』と思わずに行っていました」という発言も、私がコーディネーターとして大事にしていることを表していました。

前述した活動の説明のときにボランティアのみなさんをお願いしていることとして、「自分ができる範囲で参加してください」、があります。

私はボランティアに参加する若者に、学生の時期だけではなく社会人になっても地域に関わってくれと嬉しいなと思っています。ただ、現状としては、ボランティア活動というと学校の課題などの学校教育のコンテンツとして扱われがちで、義務的な要素が含まれてしまいます。しかし本来、地域の活動は自分が選択できる権利としてあるもので、自分の余暇の中であるものではないでしょうか。

「参加する権利はありますが、義務ではないので、自分のペースで参加してみてください。他のことで忙しければ無理する必要はないですし、本を読みたければ本を読むように、活動したければ活動してください。休むことやできないことを後ろめたく思わなくて大丈夫です。ただ、団体として動く面があるので、連絡はしっかりとしてください。それだけが唯一のルールです。

このことはボランティア皆さんに伝えていきます。大事なことはみなさんにこの権利があることです。だから他の人の休む権利も尊重してほしいですし、余裕があったらその人の担っている部分をカバーしてくれると、みんなが居心地のいい活動になると思うので協力してやっていきましょう。」

私はこのように、面談の際に話します。そういう雰囲気を作っていくことが、若者自身が本当にやりたいことにフォーカスでき、力を発揮する方法を身につける近道になるのではないかと考えています。

(専門部会委員 南 太貴)

